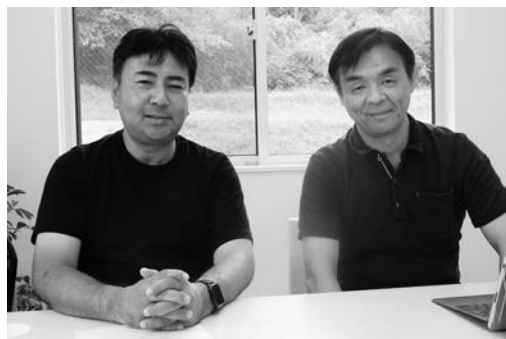


発達障害の社長が創り出した、 障害者がやりがいを感じながら 楽しく働ける職場

〈取材先〉 ココトモファーム （愛知県犬山市橋爪石畑60番地2）

■ココトモファーム

愛知県犬山市、犬山城とその城下町から南東5キロほどのところに、ココトモファームという農業法人がある。青々と広がった農地は2万6000坪、東京ドーム1.8個分の広さで、ここで米を栽培し、犬山城下町通りの2店舗をはじめ、愛知、山梨、兵庫の15店舗で、米から米粉をつくり、米粉からバウムクーヘンをつくって、販売している。米粉のバウムクーヘンはフワッと柔らかく、ほのかに甘くて、子供から若者、高齢者までみんなを笑顔にしてくれる。カラ



齋藤秀一社長（左）と藤江徹専務

フルなパッケージが、おいしさへの期待感を高め、各地で人気を博している。

4年前、この農地の取得を検討するに当たって、齋藤^{さいとうしゅういち}秀一社長は、それまで取り組んできた障害者の社会参加促進という生涯のテーマに、どうしたらこの農地を生かせるか、思い悩んだという

米づくりには人手がかかる。人手を省いて農業機械を導入しようとすれば、かなりの資金が必要になる。それだけの人手をかけ資金を投入して米を育てても、収穫した米を普通に食べる米として販売するだけなら、とても割に合わない。だからこそ、この国では、多くの人が農業後継者となることを諦めて都会に移り住み、各地で耕作放棄地が増えてしまったのだ。いまの時代に、障害者たちが農業の知識・技術・経験を身につけたとしても、それだけでみんながその後の人生を楽しく生きていけるとは想像しにくい。

そこまで考えて、齋藤さんの中に浮かん



米粉のバウムクーヘン

だのは、6次産業化するというアイデアだった。1次産業の米づくりのほかに、米から米粉、米粉からバウムクーヘンに加工するという2次産業を加え、さらにバウムクーヘンをカラフルなパッケージで包んで販売するという3次産業を加える。1×2×3＝6次産業というわけだ。これによって事業としての収益性を高めつつ、障害者たちに社会性に富んだ多様な仕事を提供することができる。

現在、米づくりのための農作業、各店舗での米粉からバウムクーヘンへの加工作業と販売といった仕事に、百数十人の健常者とともに約1割のさまざまな障害のある人たちが働いている。その中の1人、犬山城三之丸店で働く赤坂晴栄さんにバウムクーヘンづくりの様子をカメラに撮らせてもらった。以前に働いていた職場のストレスから声を失ったという人で、その後、いろいろな職場の採用面接で不採用となったが、ここで働くようになってからは、笑顔が戻り、いまでは筆談で接客もできるようになったという。



バウムクーヘンをつくる赤坂晴栄さん

■発達障害のある社長

社長の齋藤秀一さん自身も、子供の頃から、人とのコミュニケーションや、集団行動がずっと苦手だった。そのうえに集中力が続かず、成績は赤点ばかり。いわゆる「発達障害」だったと、齋藤さんは自身の半生をつづった著書の中で書いている。

1970（昭和45）年、愛知県西尾市の生まれ。人づきあいは苦手だったが、読書は大好きで、片っ端から本を読んだ。運動も苦手で、小学校時代6年間は自転車の補助輪がずっと外せなかったが、中学生になってようやく補助輪が外れ、その自転車で新聞配達をはじめ、その給料を貯めて、ポケットコンピュータを買って、やがてそれにのめりこんだ。

BASICというプログラム言語を使って、自分でプログラムを組み、ゲームづくりに没頭した。本は自分の中にさまざまな想像の世界を広げてくれたが、コンピュータは自分の力で新しい世界を生み出してい

く面白さを広げてくれたという。

人となかなか打ち解けることのできない齋藤さんを心配して、両親は齋藤さんが高校を卒業すると、彼を福井県の禅寺に入れた。しかし、齋藤さんは、そこを2ヵ月で抜け出し、その後、祖父母の家に居候しながら、いろんな仕事を転々とした。自動車部品を製造する鉄工所、スキー場のペンションの管理人、飲食店のウェイター、家電量販店の店員、土木工事会社の下水管理設作業員…など。どこへ行っても周りとは打ち解けることができず、周りから「変な奴」と思われているのではないかということばかり気になっていた。

■ネットアーツの起業

最後にパソコンショップの販売店員になった。ちょうどWindows 3.1 (1991) やWindows 95 (1995) が登場した時代である。それまで、自分でプログラムを組まねばならなかったコンピュータが、誰でも簡単に文書作成ができ、表計算もでき、さらにインターネットとつながって、世界中とコミュニケーションができるようになった。

「人生で大切なのは、人にどれだけのことをしてもらえるかではない。人にどれだけのことをしてあげられるかだ」。この頃、父が言ってくれたこの言葉で、齋藤さんの仕事への向き合い方が変わった。パソコンを求めてやってくるお客さんにパソコンの

使い方を教え、お客さんのパソコン操作をサポートするようになり、お客さんが困っていることの相談に乗るようになった。その仕事ぶりが評価され、やがて店長を任せられるようになった。

店長になった齋藤さんは、毎日の売上げをグラフにして壁に張り出した。これによって、店の業績への関心が高まり、もっと売上げを上げるために何をしたらよいかをみんなが考えるようになった。新製品が登場すると、旧型製品を大幅にディスカウントしたり、フロッピーディスクを特価で売り出すなどの工夫で、集客を増やし、在庫を一掃した。店はこうしてパソコンを売りまくり、やがて、世の中の大勢の人がパソコンを持つようになった。

パソコンは人々に無限の可能性を開いた。しかし、大半の人たちはパソコンでインターネットを見たり、文書を作成したりしているだけで、パソコンが本来持っている機能のごく一部を利用しているに過ぎない。世の中が本当に必要としているのは、パソコンを売ることよりも、それを使いこなす方法を指南してあげることではないか。そう考えるようになって、齋藤さんは、パソコンショップのオーナーがそこを寿司屋に転業したいと言い出したのをきっかけに、一緒に働いていた3人の仲間とともに新しい会社「ネットアーツ」を名古屋市内で創業した。2001年、齋藤さんが31歳のときのことである。

今回の取材で、コトモファームの農場と店舗を車で案内していただいた専務取締役の藤江徹さんは、このときパソコンショップと一緒に出た3人のうちの1人で、その後の齋藤さんをずっと支え続けてきた人である。

■放課後等デイサービス・

サポートシステムの開発

ネットアーツではパソコンを販売するだけでなく、企業・団体の勤怠管理システムや顧客情報管理システムなど、システムづくりのサポートに力を入れた。あるとき、放課後等デイサービスを展開する会社から、この会社の運営をサポートするシステム開発を支援してほしいと依頼された。

放課後等デイサービスというのは、児童福祉法に基づいて、支援を必要とする障害者手帳を持った子供たちを放課後や学校の長期休暇中に預かり、自立支援や日常生活の充実のための活動を行う施設のことで、自治体からの補助金と保護者が負担する利用料金によって運営されている。日々どのような活動を行ったか、子供たちや保護者の満足度や要望はどうか…などを、自分たちで確認するとともに、保護者と支援自治体に報告する必要がある、そのためのシステムをつくってほしいというのだった。

何月何日に施設に誰と誰が来て、何時から何時まで何をしていたか、スタッフがそれにどんな支援を与えたか、もとなるデ

ータは、毎日の支援活動の合間にスタッフがその都度パソコンに入力する。どのようなアウトプットを目標にするか、そのためにどんなデータをどんな場面で誰に入力してもらうか。そのことを探るために、齋藤さんたちは、スタッフたちの活動を連日観察し続けた。

そんな中で、あるときスタッフの忘年会に招かれ、そこで高齢の女性スタッフからこんな言葉を聞いた。「私の夢はこの子供たちが大きくなって、結婚して子供をつれて遊びにきてくれることなんです」。

この言葉にハッとさせられた。彼女らはそこまで子供たち1人ひとりと深く関わり、やりがいと責任を感じながら、この仕事に取り組んでいる。障害のある子供たちを、預かっている時間だけ面倒を見ればいいというのではない。子供たちが大きくなって世の中できちんと生きていける自信を持たせることまで含めて、お世話することが自分たちの役割、責任だと思っている。彼女らのそんな思いをきちんと理解しないままシステムをつくれれば、通り一遍のモノで終わってしまう…とふと気づいた。

そこで齋藤さんは、自分たちで実際に放課後等デイサービス事業を運営して、この仕事の本来の役割、使命を見極めたうえでシステムをつくろうと決めた。こうして2015年、放課後等デイサービス事業を展開する新たな会社「㈱まなぶ」を愛知県西尾市で起業した。子供たちを支援するスタッ

フを募集し、支援を必要とする子供たちを募集して、そのお世話をしながら、そのうえで考えられるベストのシステム開発を目指した。

(株)まなぶでは、自分たちが運営する障害者福祉施設を「ココトモ」と呼んだ。「ココでトモだちになろう」という意味である。

障害者福祉事業者の中には、障害のある子供たちを集めて、1日中部屋の中でDVDを見せたり、テレビゲームをさせたりして、ただ子供たちを囲い込むだけで補助金を稼ぐという悪徳事業者も少なくない。その一方で、自分たちが元気な間に、我が子に世の中で生きていく力をつけさせたいという保護者たちの思いは深く重い。その思いに少しでも応えるために、(株)まなぶではさまざまな放課後等デイサービス事業を展開した。日常生活訓練型、運動療育型、社会生活訓練型、視覚療育型、学習支援型、一般企業への就職支援型…など。それぞれに求められる役割機能を明確化し、そのための最適のシステムを追求した。そして事業所ごとに、無料見学会を開催し、施設運営のノウハウを公開した。

2016年4月、(株)まなぶの事業を通じて蓄積した施設運営ノウハウをもとに、ネットアーツは「障害者福祉事業者向け施設運営管理システム＝HUG（ハグ）」を完成させた。このシステムはサブスク方式で契約した施設に提供されており、会員はオンラ



ココトモファーム農場

インで無償のサポートを受けることができる。2023年5月現在の契約数は4556施設。全国の放課後等デイサービス事業所のおよそ27%に当たる。

■農福連携に向けて

HUGの開発が一段落した後、(株)まなぶですすめてきた放課後等デイサービス事業をもう一歩先にすすめることが、齋藤さんのその次のテーマとなった。児童福祉法による放課後等デイサービスの対象は高校生、18歳までと決まっていた、18歳以上になると行政からの支援の輪が切れる。その後は一般企業で働くことが想定されており、障害者雇用促進法によって、企業は現在従業員数の2.3%以上の障害者を雇用しなければならないことになっている。だが、未達の場合の1人当たり月5万円の納付金を支払うことでそれを免れている企業が少なくなく、障害者が安心して働ける場の確保は、いまもなおこの国の大きな課題であり続けている。

「昔はみんなで田んぼをやって、わいわ



ココトモファーム犬山城三之丸店



ココトモショップの店頭にて

い話しながらご飯を食べた。あの頃は楽しかったな」。犬山市で農業をやっていた齋藤さんの奥さんのお父さんからこの言葉を聞いたことがきっかけで、齋藤さんは「農福（農業と福祉）連携」を考えるようになり、2019年には犬山市で農業法人の設立を申請。たまたま同市内で2万6000坪の広大な農地を残して離農した農家がいることを犬山市役所から聞かされた齋藤さんは、H

U Gの売上げの一部を投入してこの農地を活用することにし、ココトモファームを立ち上げた。

2023年、冒頭で紹介したココトモファームの事業は、地域の活性化や所得向上に取り組んだ優良事例として「第9回ディスカバー農山漁村の宝」に選定され、総理大臣官邸で岸田総理から表彰され、以来、世間の注目を浴び続けている。

※本稿の執筆に当たって次の図書を参考にしました。齋藤秀一著「改訂版 発達障害でIT社長の僕」（幻冬舎、2023）

取材・執筆 山口 幸正（やまぐち ゆきまさ）

《プロフィール》

外資系食品製造業人事部勤務の後、産業教材出版業勤務。全国提案実績調査を担当し、改善提案教育誌を創刊。1985年に独立し創意社を設立、『絵で見る創意くふう事典』『提案制度の現状と今後の動向』『提案力を10倍アップする発想法演習』『提案審査表彰基準集』『改善審査表彰基準集』『オフィス改善事例集』などの独自教材を編集出版。40年にわたって企業・団体の改善活動を取材。現在はフリーライター。

●創意社ホームページ <http://www.souisha.com> 「仕事の事典」をネット公開中